

晚 花

馬場あき子歌集



昭和歌人集成・4

晚 花

馬場あき子歌集

短歌新聞社

晚 花 <昭和歌人集成 4>

昭和60年6月10日 初版発行

昭和61年10月25日 3刷発行

著者 馬場あき子

発行人 石黒清介

印刷 協同印刷 KK

発行所 短歌新聞社

〒166 東京都杉並区高円寺南4-43-9

振替口座 東京 5-21683

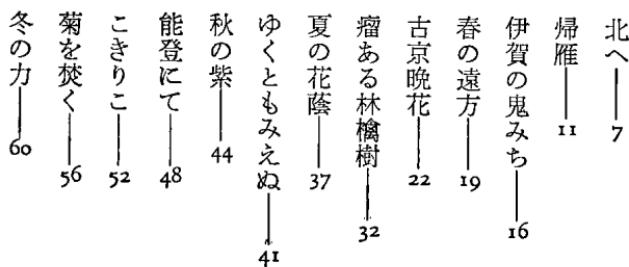
電話 03 (312) 9185

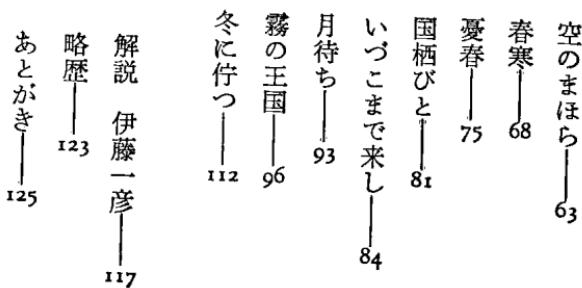
1092-000269-4362

定価 1400円

目

次





晚

花

北へ

来し方も無念無想のさびしさとなりて吹き飛ぶ鷗ありたり

東北の雪に発つ汽車いたづらに身をなすに似てふとほほゑまる

遠く来て三春の偶人の灯は暗し美女舞の紅くらし

さざれ水見つめて佇てる鳥るてあな寂び寂びし覚悟のごとき

ふり仰ぎみれば鷗の腹太し静かにわれの年改まる

知りすぎし心の^ゞとき石蕗の花長き日向はかすかに妬め

冬の雨ぐんぐん晴れてしまひたり落ちたる椿一つ朱を吐く

落葉踏む音よりいたくかすかにて野猫踏みゆく霜柱みゆ

一隅にゆきて死なむとする歩み羽ををさめし蜂は地にある

沈みつつ流るる木の葉見送れば思案ばかりの冬深みかも

ちらちらと冬かげろふの燃えてゐる鉄路もあこがれののちの静けさ

深みゆく季節のあはひ飛ぶ鳥のゆるく重げにゆく心かな

着ぶくれてひとり発ちゆく東北のふぶくときけばかすかにたのし

帰雁

風にゆく凧の力を打ち泣きてありし乙女もここに土着す

山姥も出でて泣く日ぞ遠山に晴れながら降るみぞれみてゐる

山の林檎嚙みて痛めし冬歯もち静かに積る雪をみてゐし

山越えて何せんされど目的のなき山も越ゆ春の思ひに

言ふことをやめて空みるたをやぎて雁帰ること慕情のやことし

久里浜に売らるる冬の大魚ゐてあぎとへば青き空も音する

海の香の雪となりゆく大漁旗^{じやげい}二月の底に暗く身を揉む

家々に水甃の水ひそまりし立春の厨^{くりやん}・節分の井戸

高層を一気に上り空に降る雪をさびしみくだりきしかな